

詩篇101-104篇 「永久への思い」

1A 王宮の中の清め 101

2A とこしえの御座 102

1B 嘆きの祈り 1-11

2B シオンへの憐れみの時 12-22

3B 永久の住まい 23-28

3A 人に対する恵み 103

1B 個人的罪の赦し 1-5

2B 主を恐れる者への憐れみ 6-18

3B 神の王国 15-22

4A ご自分の被造物に対する恵み 104

1B 天地創造の偉大さ 1-9

2B 地上の生き物への備え 10-23

3B 海の生き物の支配 24-30

4B 御心に適う思い 31-35

本文

1A 王宮の中の清め 101

101 ダビデの賛歌

ダビデの賛歌です。私たちは前回、主なる神が王となることをほめたたえる、喜び叫ぶ歌を読んできました。そして101篇は、ダビデが神に選ばれた王として、どのように治めていくのか、彼の強い思いと決意を言い表している賛歌です。

101:1 私は、恵みとさばきを歌いましょう。主よ。あなたに、ほめ歌を歌いましょう。

ダビデはまず神の「恵み」、自分やイスラエルの民に与えられる真実な愛に目を向けています。そして、「さばき」に目を留めています。国を治めるのに必要なのは正しい裁きだからです。ダビデは、イスラエルが神の恵み深さで満たされ、そして神の公正が満ちているところであってほしいと願っています。

101:2 私は、全き道に心を留めます。いつ、あなたは私のところに来てくださいますか。私は、正しい心で、自分の家の中を歩みます。101:3 私の目の前に卑しいことを置きません。私は曲がったわざを憎みます。それは私にまといつきません。101:4 曲がった心は私から離れて行きます。私は悪を知ろうともしません。

ダビデは、まず自分自身が全き道に留まっていることを願っています。まずは自分自身が正しく歩み、それから周囲の人々から悪を取り除き、そして国全体へその正義を引き伸ばします。彼は王としての公務と私生活を分けることをしなかったのです。ここは、国の指導者でも、学校の指導者でも、家庭でも、そして教会でも指導者に必要とされている資格ですね。「1テモテ 3:2-4 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。」

ここには、監督が非難されるところがないという資格があります。そしてダビデは、「全き道に心を留めます」とあります。これが完全無欠でなければいけないというものであれば、私も、また他の人々も指導することはできないでしょう。これは、ダビデが初めに祈ったように、主の恵みと裁きに拠り頼む、つまり主に全面的に拠り頼んでいる人かどうかが問われるのです。パウロは、このことをしっかりと認識している人でした。「1コリント 15:9-10 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」自分自身には何も良いものがない、しかし神の恵みによって今の私がいるのだ、という悟りを得ていれば得ているほど、その人は神に用いられるようになります。

ダビデは、「卑しいことを目の前に置かない」と言っています。これは、不信なことば、疑いのことば、投げやり、見下げる、偽りや欺きといった類のものです。こうしたものが目に入れば、自分の道が曲げられてしまうと懼れたのです。

101:5 陰で自分の隣人をそしる者を、私は滅ぼします。高ぶる目と誇る心の者に、私は耐えられません。101:6 私の目は、国の中の真実な人たちに注がれます。彼らが私とともに住むために。全き道を歩む者は、私に仕えます。101:7 欺く者は、私の家の中には住みえず、偽りを語る者は、私の目の前に堅く立つことができません。

ダビデは、自分自身に気をつけていながら、次に自分の側近たちに気をつけていました。そしる者は取り除きました。代わりに、真実な人々を自分にかたわらに置きます。そうですね、主に用いられる人は、透明な人でなければいけません。透明とは、隠し立てなく主に仕え、また他の人に接している人です。何よりも、共に仕えている者たちの間に信頼関係がないといけません。その時だけはへつらい、また取り繕い、その場しのぎで奉仕をしているようであれば、奉仕者として失格です。

101:8 朝ごとに、私は国の中の悪者をことごとく滅ぼします。それは主の都から、不法を行なう者

をことごとく断ち切るためです。

朝ごとに、というのは、王が裁きの座について、民を裁く時のことを指しています。朝ごとに、悪者にこびへつらうことなく、しっかりと裁くということです。この地道で、勤勉な働きをやって、初めてエルサレムの都から不法な者がいなくなります。小さなことに忠実だから、主は大きなことをその人を通して行ってくださいます。

2A とこしえの御座 102

102 悩む者の祈り。彼が気落ちして、自分の嘆きを主の前に注ぎ出したときのもの

題名がそのままですね。彼は悩んでいて、気落ちしています。けれども、12 節から主をほめたたえています。それは主の御言葉を思って、信仰をもって祈っているからです。おそらく、これはバビロン捕囚の時の祈りではないかと思われます。孤独感を味わい、敵のそしりを受けていましたが、それでもエレミヤの預言した七十年が近づいていることを、知ったのかもしれない。

1B 嘆きの祈り 1-11

102:1 主よ。私の祈りを聞いてください。私の叫びが、あなたに届きますように。102:2 私が苦しんでいるときに、御顔を私に隠さないでください。私に耳を傾けてください。私が呼ぶときに、早く私に答えてください。

嘆願の思いが非常に強くなっています。切実な思いを言い表す時に、「耳を傾けてください」「御顔を背けないでください」と表現します。

102:3 私の日は煙の中に尽き果て、私の骨は炉のように燃えていますから。102:4 私の心は、青菜のように打たれ、しおれ、パンを食べることさえ忘れました。102:5 私の嘆く声で私の骨と皮はくっついてしまいました。102:6 私は荒野のペリカンのようになり、廃墟のふくろうのようになっています。102:7 私はやせ衰えて、屋根の上のひとりぼっちの鳥のようになりました。

自分の肉体の痩せ衰えを話しています。それは、嘆きによって心がしおれている、落ち込んでいるからです。そして、強い孤独感を味わっています。荒野のペリカン、廃墟のふくろう、そして屋根上のひとりぼっちの鳥です。

102:8 私の敵は一日中私をそしり、私をあざける者は私を名ざして毒づきます。102:9 これはみな、私が、パンを食べるように灰を食べ、私の飲み物に涙を混ぜ合わせたからです。102:10 それはあなたの憤りと怒りとのゆえに、あなたが私を持ち上げ、投げ出されたからです。102:11 私の日は、伸びていく夕影のようです。私は、青菜のようにしおれています。

敵のそしりのなかにいます。それで嘆きが自分の食物のようになってしまっているといいます。そのそしりによって、感情では神からの怒りを感じています。しかし本当は、神は味方ですね。けれども、私たちの感情はその反対を教えます。そして、自分の日が終わるのではないか、つまり猛進でしまうのではないかと落ち込んでいます。

2B シオンへの憐れみの時 12-22

102:12 しかし、主よ。あなたはとこしえに御座に着き、あなたの御名は代々に及びます。

ここで詩篇の著者は、主ご自身の目を留めます。先ほどもダビデが、「私は、恵みとさばきを歌いましょう。」と言って、今起こっていることではなく、主ご自身とそこご性質や働きに目を留めたのです。云わばこれは、「神の御言葉をいの祈り」と言ってよいでしょう。主がとこしえの御座についておられること、これは御言葉の真理です、それを宣言して祈っているのです。つまり、バビロンによって敵の虐げを受けていて、バビロンには王座があるけれども、とこしえの王座は神ご自身が着いておられるということです。

102:13 あなたは立ち上がり、シオンをあわれんでくださいます。今やいつくしみの時です。定めの時が来たからです。102:14 まことに、あなたのしもべはシオンの石を愛し、シオンのちりをいつくしみます。102:15 こうして、国々は主の御名を恐れ、地のすべての王はあなたの栄光を恐れましょう。102:16 なぜなら、主はシオンを建て、その栄光のうちに現われ、102:17 窮した者の祈りを顧み、彼らの祈りをないがしろにされなかったからです。

「いつくしみの時だ」「定めの時だ」と言っています。エレミヤによって、七十年の捕囚というものが定められていました。だから今、その回復が来るのだという信仰が与えられたのです。今、置かれている状況は全く違うことを教えているけれども、御言葉がその通りなのだから、間もなく必ずそうなると思って喜んでいるのです。

これは、バビロン捕囚の時には一部は成就しました。彼らは確かに、シオンを建て直すことができました。神殿を再建し、城壁を建て直しました。けれども、国々が主の御名を恐れ、地のすべての王はあなたの栄光を恐れるということは起こっていません。つまり、これはイエスが戻ってこられて、実現される神の国だということです。しかし、主はもうその前座を成就されました。1948年に、神はイスラエルの国を建て直してくださいました。そして、シオンの石を愛して、その塵をいつくしむことができるようになりました。そして、国々がイスラエルの神、主の御名を恐れて行くようになっているのは、世界が福音によってキリストを信じている中で徐々にそのようになっています。けれども、王たちまでが主を恐れているようにはなっていません。

なぜなら、主がシオンを建て、栄光のうちに現われるというのは、再臨の時に完成するからです。エルサレムが回復して、そこに主ご自身が栄光を輝かせ、そして国々がイスラエルのところまでや

ってきて、主を礼拝します。

102:18 次のことが、後の時代のために書きしるされ、新しく造られる民が主を賛美しますように。
102:19 主はその聖なるいと高き所から見おろし、天から地の上に目を注がれました。102:20 捕われ人のうめきを聞き、死に定められた者を解き放つために。102:21 人々が、主の名をシオンで語り、エルサレムで主を賛美するために。102:22 また、国々の民や、王国が共に集められるとき、主に仕えるために。

ここで大事なことは、詩篇の著者が明らかに、主を御国で賛美する人々は「新しく造られる民」であるということです。これには二つの意味があります。一つは、イスラエルの民が御霊によって新しくされるということ。彼らが刷新するということです。そしてもう一つは、異邦人の加えられた人々が主を賛美しているということです。国々の民が主に仕えるためにやってきます。「このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現する(エペソ 2:15)」と使徒パウロは言いました。主が上からの御霊によって、人々を刷新します。そして、律法によって隔ての壁ができていたユダヤ人と異邦人がキリストにあつて、両者とも御霊の新生によって一つとされます。私たちの霊的 DNA がみな、キリストにある者となったので、どんな背景であっても、私たちは新しい人として一つになっているのです。

3B 永久の住まい 23-28

102:23 主は私の力を道の途中で弱くされ、私の日数を短くされました。102:24 私は申しました。「わが神よ。私の日の半ばに私を取り去らないでください。あなたの年は代々に至ります。

詩篇の著者は、たった今、自分の肉体の力を覚えています。けれども、「私の日の半ば」と言っているのも、まだ四十歳のような、若い年齢なのかもしれません。ですから、自分をこの世から取り去らないでくださいと懇願していますが、その根拠がすばらしいです。「あなたの年は代々に至ります。」と言っています。自分は衰えて死んでしまっても、自分が主についている者であれば、主の年は代々に至るのだから、私も同じように生きることができるという信仰なのです。

これを、「神の恵みがいのちにも優る信仰」と言えばよいでしょう。自分の命は限りがあるけれども、限りのない方に拠り頼んでいるから、私もその方の命によって長く生きる、あるいは死んでもよみがえるのだということを知るので。したがって、例えば二十一人のエジプト人クリスチャンが、イスラム国によって殺されましたが、クリスチャンたちは首が切られる直前に、「おお主イエスよ」と言ってビデオにうつったのです。彼らにとっては、この地上の命が断たれても、永遠に生きておられるイエスにつながっているのです、この世の命を厭わなかったのです。

102:25 あなたははるか以前に地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。
102:26 これらのものは滅びるでしょう。しかし、あなたはながらえられます。すべてのものは衣の

ようにすり切れます。あなたが着物のように取り替えられると、それらは変わってしまいます。102:27 しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。102:28 あなたのしもべらの子孫は住みつき、彼らのすえは、あなたの前に堅く立てられましょう。」

この箇所は、ヘブル書 1 章に引用されている言葉です。今の天地が、まるで神ご自身の着物であるかのように、古びたものは新しい天地に交換されるという約束です。したがって、終わりの日には全てのものが滅びて、けれども神ご自身がながらえます。そして神は新しい天と地を造られます。その時に、神のうちにいる者はここにあるように子孫としてその新しい都に住みつくのです。そして、堅く立てられるのです。「1ヨハネ 2:17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。」

ですから、この詩篇の著者は主にしっかりと目を留めることによって、自分の孤独や受けているそしりを神に御言葉そのものを祈ることによって、その霊的現実の中に入っているのです。

3A 人に対する恵み 103

103 篇と 104 篇は、「わがたましいよ。主をほめたたえよ。」という言葉から始まる詩篇です。主が成してくださったすばらしい御業を、心の奥底から、体全体から覚えて、ほめたたえています。今日の学びのテーマです、主の御業、主のことに自らを献身させます。その中で主をほめたたえます。

1B 個人的罪の赦し 1-5

103 ダビデによる 103:1 わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。103:2 わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

この命令に従いたいですね。主に良くしてくださったことを、何一つ忘れない。こんなにも良くしてくださったのだ、ということを経験に留める。私たちはすぐに忘れる性質を持っています。数々の罪を犯す原因は、「神を知っていながら、その神を神としてあがめることをせず、感謝もせず、かえってその思いは暗くなり」とローマ 1 章 21 節にあります。そして、終わりの日は困難な時代がやって来て、その時に「感謝することを知らない者」という言葉がテモテ第二 3 章 2 節にあります。感謝をしていないので、与えられているものが当然受けるべきものだと思うこと。それで、与えられないと怒り、不満を鳴らすこと。そして、そしること。こうした高ぶりの心が、終わりの日の特徴です。しかし私たちは、心いっぱい、体をはって、主が良くしてくださったことをほめたたえるのです。

103:3 主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、103:4 あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、103:5 あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

私たちが自分の罪がすべて赦されたということを思うだけで、私たちはその感謝から神の恵みと憐れみに満たされて、主の良い物でさらに満たされることができます。また霊が新たにされます。罪が赦されたことを忘れてしまうと、その頑なな心がさらに罪を犯す要因となります。使徒ペテロが警告しました。「これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。(2ペテロ 1:9)」私たちは、しっかりと主が自分の全ての罪を清めてくださったことを思い出し、それによって心感謝でいっぱいにして、それで二度とその愚かさに戻らない努力をする必要があります。

2B 主を恐れる者への憐れみ 6-18

103:6 主はすべてしいたげられている人々のために、正義とさばきを行なわれる。103:7 主は、ご自身の道をモーセに、そのみわざをイスラエルの子らに知らされた。103:8 主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。103:9 主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。103:10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。103:11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。103:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

ダビデはここで、イスラエルの民全体に行ってくださいの業を思い起こしています。6節は、エジプトでの彼らの姿でした。奴隷として虐げられました。しかし、主がエジプトの圧政に対して正義と裁きを行なってくださいました。そして、シナイ山において、ご自身の名を明らかにされたのです。それは、憐れみ深く情け深い、怒るに遅く、恵み豊かであるということです。したがって、主が一時期、彼らを懲らしめることはありますが、それは滅ぼすためではなく、むしろ彼らを立ち上がらせるためであります。ですから、彼らが立ち上がる時にここに書かれてあるような豊かな憐れみを注いでくださるのです。

103:13 父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。

神との関係は、父と子の関係に入りました。ところで、その関係を持つことができるのは、「ご自分を恐れる者」とあります。11節にも、「御恵みは、主を恐れる者の上に大きい」とあります。他の人の評価ではなく、ただ主の評価のみを気にする態度です。主が何を行なわれているのか、何をお考えになっているのか、この方の御心を最優先する時に与えられる恵みであり、憐れみです。

103:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。103:15 人の日は、草のよう。野の花のように咲く。103:16 風がそこを過ぎると、それは、もはやない。その場所すら、それを、知らない。103:17 しかし、主の恵みは、とこしえから、とこしえまで、主を恐れる者の上にある。主の義はその子らの子に及び、103:18 主の契約を守る者、その戒めを心に留めて、行なう者に及ぶ。

ここにダビデの、いのちにまさる神の恵みの理解が再びここにあります。他の詩篇の箇所には、「63:3 あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私のくちびるは、あなたを賛美します。」とあります。もちろん、私たちの命は神に与えられたものであり、貴いものです。しかし、命と神であれば、もちろん命を授ける神ご自身が敬われる対象です。命があたかもいつまでも続くという前提のもので、人々は動きます。しかし、命というのは、はかないものであり、執着してはならないのです。しかし、神の恵みは代々に及びます。命ははかないけれども、恵みはとこしえまで続くのです。

3B 神の王国 15-22

103:19 主は天にその王座を堅く立て、その王国はすべてを統べ治める。103:20 主をほめたたえよ。御使いたちよ。みことばの声に聞き従い、みことばを行なう力ある勇士たちよ。103:21 主をほめたたえよ。主のすべての軍勢よ。みこころを行ない、主に仕える者たちよ。103:22 主をほめたたえよ。すべて造られたものたちよ。主の治められるすべての所で。わがたましいよ。主をほめたたえよ。

天にまで及ぶ神の恵み、とこしえまで続く神の恵みを歌ったので、今、天において行われている、神への賛美を共に歌っています。御使いたちが、主の御言葉の声に従い、それを行なう力強い勇士として例えられています。そして、軍勢とも言われています。天使たちが今、大声で主を賛美しているのです。そして地上にあるものも、地の下にあるものもすべてが主をほめたたえます。黙示録 5 章 11-13 節を思い出します。「また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」」

私たちが、いかに天を思い、地上を思わないでいられるか、いつも戦いの中にいます。使徒パウロがコロサイ書の中でこう言いました。「3:1-2 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」地上のものを見ている中で、私たちは自分の肉体に働く悪い欲に引き寄せられてしまいます。その出発点は、主の良くてくださったことを思い出すことです、何一つ忘れないことです。その突破口が開かれれば、主が見ておられるようにこの世界を見ることができるようになります。そして、天の幻にも目が開かれます。

4A ご自分の被造物に対する恵み 104

そして 104 篇ですが、103 篇が人に対する罪の赦しという、神の恵みが書かれているのに対して、104 篇は自然の中にある神のすばらしさが書かれています。私たちには、神の恵みについて

二種類の恵みを受けています。一つは、神学用語で「特別恩寵」と呼ばれるものです。罪の赦しを受けたという恩寵、恵みです。そしてもう一つは「一般恩寵」と呼ばれるものです。これは、自然や一般的な事柄において受けている恵みであり、聖書によってのみ悟ることのできる特別恩寵とは区別されます。

1B 天地創造の偉大さ 1-9

104:1 わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまっております。

これから、詩篇の著者は天地創造に見られる神の偉大さ、その尊厳と威光を見つめていきます。

104:2 あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。104:3 水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。104:4 風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使とされます。

私たちが目にしている、上空における神の働きです。飛行機で上空にいと、本当に不思議な気分になります。確かに天を衣のように広げている神がおられます。そして雲がありますが、それはみな水分です。それが空中に浮いているのです。そして風を吹かせています。さらに稲妻も落ちますが、火をその中から降らすことさえも行われます。

104:5 また地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。104:6 あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていた。104:7 水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の聲で急ぎ去りました。104:8 山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。104:9 あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。

もう一つ、私たちが畏怖の念を抱かせるのは、海の不思議です。当初、地の上に水があるのみでした。山々の上にも水が留まっていた。けれども、水が神の声によって逃げ去り、山と谷ができて、それで定められたところに移っています。境があり、それを越えることがないようにされました。私たちの持っている地図は、殊更に変更しなくてもその境は変わることがありません。ノアの時代に神は天地創造の二日目までの時のようにされましたが、それ以降は今のままです。

2B 地上の生き物への備え 10-23

ここまで、天、地、そして海という三つの部分における神の偉大な業を語りましたが、次に陸に住む者たち、人も動物、植物に与えられる神の備えを見ます。

104:10 主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、104:11 野のすべての獣に飲ませられます。

野ろばも渴きをいやします。104:12 そのかたわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています。104:13 主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわぎの実によって満ち足りています。104:14 主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます。人が地から食物を得るために。104:15 また、人の心を喜ばせるぶどう酒をも。油によるよりも顔をつややかにするために。また、人の心をささえる食物をも。

主が泉によって水を野の獣に与えておられ、また山の上に水を注ぎ、それによって地が実を結んでいます。家畜のため、また人のための植物を実らせておられます。私たちが楽しむ食べ物も、飲み物も与えておられます。

104:16 主の木々は満ち足りています。主の植えたレバノンの杉の木も。104:17 そこに、鳥は巢をかけ、こうのとりは、もみの木をその宿としています。104:18 高い山は野やぎのため、岩は岩たぬきの隠れ場。

主が水を与えておられるので、木々が生えて、そのおかげで鳥やヤギ、岩たぬきが棲みかを得ることができています。

104:19 主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています。104:20 あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。104:21 若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます。104:22 日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります。104:23 人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます。

興味深いですね、夜行性動物と人との区別を神は与えられました。獣が動き始める時が昼であれば、働いている人間が襲われるかわかりません。けれども、夜に動くので安心して昼に活動します。そして交代制であるかのように人間は夕方には働きをやめるのです。

3B 海の生き物の支配 24-30

104:24 主よ。あなたのみわぎはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています。104:25 そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。104:26 そこを船が通り、あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます。104:27 彼らはみな、あなたを待ち望んでいます。あなたが時にしたがって食物をお与えになることを。104:28 あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足りります。104:29 あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、彼らは死に、おのれのちりに帰ります。104:30 あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます。

主が行われている海にある生き物に対する働きかけです。大小の生き物がいますが、巨大な生き物レビヤタンを取り上げています。レビヤタンは、ヨブ記 39 章にも出てくる、竜ではないかと思われる生き物です。当時は住んでいたのでしょう。そして、そのような制御しがたい恐ろしい生き物であっても、食物がないために死に絶えることもあったようです。それらは、神の与えられる食物がなければ、そのように生きていくこともできないか弱い存在でありました。

そして、「地の面を新しくされました」とありますが、これは水の循環です。雨によって落ちた水が川となり、そして海に入っていきます。海にある水は、いつも同じものではなく絶えず変えられ、新たにされています。

4B 御心に適う思い 31-35

104:31 主の栄光が、とこしえにありますように。主がそのみわざを喜ばれますように。104:32 主が地に目を注がれると、地は震え、山々に触れられると、山々は煙を上げます。

火山の活動です。シナイ山において主が降りてこられたら、このような現象が起りましたが、主が少し目を向けられると火山の活動が始まります。

104:33 私は生きているかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう。
104:34 私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう。104:35 罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ。主をほめたたえよ。ハレルヤ。

自然界における、神の偉大さと栄光を見上げて、最後は神の御心にかなっていることを願い、歌いました。神がこのように自然において秩序を与えておられるのであるから、自分自身も神の秩序の中で、すなわち心と思いが御心にかなうように生きられるように祈っています。

ここで調和ということを考えます。自然に調和があるのは、神がそれを保っておられるからです。天地創造には秩序と調和がありますが、最後のご自分の作品として人間を造られました。そしてその人間が地にあるものを支配するように命じられました。秩序を崩すのは、一体なんなのでしょうか？それは独立することです。どの部分も、他の部分と結び付いており、頭である神にそれぞれがつながっていることによって調和しているのに、自分で動こうとする時に全てが乱れます。ですから、ここで「悪者が地から絶え果てるように」と祈っているのです。自然界のどこかで狂いが生じると全体にその悪影響が及ぶように、人が神の御心に背いても全体に狂いが生じます。

自然界全体にある調和と、私たちの人体にある調和は似ています。全てが相互に関わりあっています。連関しています。ところが、一つの細胞が勝手に動き始める時に、それを何と言いますか？癌細胞と言うんですね。体全体を蝕み始めるのです。同じように、私たちは夫婦や家族にも、

決して切り離せない結びつきがあります。そして教会は、「キリストの体」であります。キリストの血が私たちに降り注がれており、それによって互いに結びついています。自分で何かをしようと考えているのが、今日の社会です。自分がキリストのものであり、ゆえにキリストにあって互いに結びついているという見方が必要です。自然にある調和を見て、自分自身も完全に神に服している存在なのだということを知り、そしてただ神の国のためにだけ行きます。その時に、全体が多彩な輝きを持って、神の栄光を反映するのです。